

1.11 「浦島太郎」100周年

♪ むかし むかし 浦島は 助けた亀に 連れられて
竜宮城へ 来て見れば 絵にもかけない 美しさ

これは、私たちの年代なら誰でも知っている文部省唱歌「浦島太郎」の1番。
この歌が作られたのは、今から丁度100年前の1911年(明治44年)でした。
今年(2011年)は、「浦島太郎」百周年なんですね。

この歌、「浦島」伝説を元に、「良いことをすれば、良いことがある」し、「約束を守らなかつたら、報いが来る」という、実に、明治の文部省が言いたかったことを、ここまであからさまに言うか、と思えるほど単純に言ってますよね。

今の子なら、本当？ って、始めから疑わしい目で見そう。

これを歌っていた子どもの頃の素直だった私が、この1番を歌いながら疑問に思ったこと。
竜宮城って海の中にあるみたいだけど、息できるのかなあ？
思いませんでした？

♪ 乙姫様の ごちそうに 鯛やひらめの 舞踊り
ただ珍しく 面白く 月日のたつのも 夢のうち

これは二番の歌詞。
鯛やヒラメが踊るんだから、やっぱり海の中としか思えないよね。
鯛さんもヒラメちゃんも、踊った後、食べられちゃうのかな。
でも、毎日、魚ばっかだと、すぐ飽きちゃうよね。

♪ 遊びにあきて 気がついて おいとまごいも そこそこに
帰る途中の 楽しみは みやげにもらった 玉手箱

お礼にご招待されたのだから、当然お土産もあるよね。

♪ 帰って見れば こはいかに 元居た家も村も無く
みちに行きあう人々は 顔も知らない者ばかり

♪ 心細さに 蓋取れば あけて悔しき 玉手箱
中からぱっと 白けむり たちまち太郎は おじいさん

これは、四番と五番の歌詞。
楽しみにしていたお土産なのに、開けたらどうして年取っちゃうのかな？

これ、おみやげじゃあないよね。
太郎ちゃん、騙されたんだ。
何かあったのかな？

よっぽど、音楽の先生に聞いてみようかな、と思ったんだけど、ちょっと綺麗で、可愛
いかった〇〇先生、何となく聞くと悪いような気がして、とうとう聞けずじまい。

さて、月日が流れて、次に、私がこの歌に巡り会ったのが、万葉集を読んでいたとき。
万葉集巻九 「水江の浦島子を詠める一首並びに短歌」
アレッ、これって、浦島太郎じゃない？

ところが、ところが、読んでみてびっくり。
浦島太郎の文部省唱歌とは、随分違うのです。

まず、どこにも亀が出てこない。これはショックでしたね。
もちろん亀を助けるなんて話はどこにもない。

万葉集では、太郎ちゃん、釣りをしているうちに、たまたま海の神様の娘さんに出会って、
両方が一目惚れしちゃって結婚するんですよ。

もっとショックだったのは、玉櫛笥(玉手箱)を開けた太郎くんはもちろん老人になってしま
うのだけど、その場面がスゴイ。太郎くん、七転八倒、息絶えて死んでしまうのですね。

その様子は、パイレーツ・オブ・カリビ안의「呪われた海賊たち」とか、インディ・ジョー
ンズの「最後の聖戦」などの映画で出てくるシーン、みるみるうちに肌に皺がよって、黒
くなり、髪は白くなって抜けていき、骸骨になっていくシーンを彷彿とさせるのです。

怖わ～。

これって、ひどいと思いませんか？
お土産と言って騙しておいて、開けると、殺されちゃう？

これ、ひよっとすると、別れ話に頭にきた海神の娘さんに恨まれた？
大体、神様の娘さんなんて、間違いなく我が儘に育てられていますからね。

まあ、性格上、調べないわけにはいきませんから、その後、図書館で調べました。
結果は、なかなかややこしいのです。

続きは、また明日。

1.12 万葉集の浦島太郎クン

昨日の話（浦島太郎 100 周年）の続きです。

昨日、万葉集では、亀さんが出てこない！と言いましたが、じゃあ、先導役の亀さんなしで、二人はどうやって出会ったのかって思いますよね。

万葉集では次のように書かれています。

浦島太郎クン、

「海塚を 過ぎてこぎ行くに 海若(わだつみ)の神の女に たまさかに いこぎ(漕ぎ)向ひ あい(相)とぶらひ こと成りしかば かき結び 常世に至り」
という具合。

[勝手に付けた訳]

「浦島太郎クンが水平線の遠くまで漕いでいくと、**偶然**に海神の娘と出会って、言葉を交わすうちに、一緒に暮らそうということになり、契りを結び、海の彼方にある不老不死の世界に行ったのです」

ね、亀さん、出てこないでしょ。

たまたま出会ったっていうんだけど、私思うに、相手が悪いですよ。海神様の女（むすめ）だなんて、浦島クンの不幸なさだめ。

今の世でも、「逆玉」は、たいてい不幸の始まり。ホント。

ところで、行ったのは海の中の竜宮城？

これねえ、海の中かどうかはっきりしないのですよー。行ったのは「常世にある海神の宮」。

次に、問題の玉手箱を開けるシーン。

万葉集では、次のように書かれています。

「玉くしげ(玉手箱) 少し開くに
白雲の 箱より出でて
常世べに たなびきぬれば
立ち走り 叫び袖振り こいまろび 足ずりしつ々
たちまちに 情(こころ) 消失せぬ
若かりし膚(はだ)もしわみぬ
黒かりし 髪も白けぬ
ゆなゆなは 気(息)さへ絶えて 後つひに 命死にける」

どうです？

昨日言ったとおりでしょ。インディ・ジョーンズ思い出しません？



どう見ても、私には、誰かさんの恨みがあったとしか思えないのですが、どう思います？

ところで、万葉集の記述はそう詳しく書かれているわけではありません。

ご承知かも知れませんが、浦島クンのお話、すごい古くからあって、万葉集だけでなく、日本書紀、風土記などにも書かれているんですね。

そのどれもが似ているようで、違うようで、
ご自分で判断してもらうしかないのですが、
なかでも、風土記の記述はかなり詳しいので、次に、これを見てください。
でもね、風土記の方のお話は大変長いので、ダイジェストしないと、途中で万歳しちゃい
そうになります。

ということで、私が勝手にダイジェストしてみたのですが、それでもかなり長くなるので、
また明日。

え、何かに似てきた？

そう、千一夜物語を真似てみました。

1.13 風土記のイケメン浦島クン

昨日、浦島クン、日本書紀にも登場すると言った以上、ちょっとだけでも触れて置かなきゃ片手落ちかなと思ったので、風土記の話に入る前に、日本書紀の浦島クンを見ておきたいと思います。日本書紀の浦島クンのお話は実に素っ気なくて、僅かに数行。

まあ、なんといっても日本書紀は一応正史ですし、浦島クンのお話は庶民の出来事に過ぎないからでしょうかね。

[勝手な訳]

雄略天皇の22年(西暦478年)の秋七月、丹波の国、与謝郡の筒川の水江に住む浦嶋子は舟に乗って釣りに出て、亀を釣るのですが、その亀はたちまち女に姿を変え、心を奪われた浦嶋子は、一緒に海に入り、蓬莱山に行きました。続きは別巻。

日本書紀、この続きは別巻でと言って、突然ここで話を打ち切っています。

わが国の公式文書である日本書紀なのに、「後はほかの本を見てね」なんて良いのかなあって思ったけれど、中央版正史は日本書紀、地方版の報告公文書は風土記とされていたようだから、ここから先は地方の出来事ということでしょうかね。

日本書紀で注目したいのは、初めて亀さんが出てきていることでしょうか。

ただ、浦嶋子クン、亀さんを助けてはいないのですけどね。

さて、この別巻とされている丹後国風土記ですが、ご承知のように本文は失われていますので『釋日本紀』などからの引用になりますが、この中の「浦嶋子」を読むと、確かに、このお話の筋は、日本書紀と続いている気がします。

お待たせしました。では、風土記の浦の嶋子のお話。

但し、長いので、またまた私の勝手なダイジェスト。

『雄略天皇の時代、浦の嶋子(本名筒井嶋子、男性、年齢不詳。浦の嶋子は俗名)は一人で釣りをしていましたが、三日三晩経っても一匹も釣れず、フテ腐れていたところに1匹の五色の亀がかかります。とりあえず船に上げたのはいいのですが、彼はすぐ眠くなって寝てしまうのです。

目を覚ますと、亀は絶世の美女に姿を変えており、イケメンだった嶋子クン、寝ぼけまなこで、アレ???

(あ、ここで補足しておきますが、風土記では、嶋子クンすごいイケメンだと書かれているのです!)

ホントですよ。お疑いの方は是非本文を読んで下さい。

で、木村拓哉クンばりの嶋子クン、その女性から

「私、天上の神仙の国から来たんですけどー、お付き合いしてくれないかしら。ずっとい

つまでもあなたの傍にいたいの～」

と言い寄られ、誘惑されちゃうのですね。

ここで断っては男がすたる。

では、と言うわけで、海の彼方の蓬莱山を目指して漕ぎ出すのです。

まあ、今も昔も、男ってのはチョロイものですねえ。

蓬莱山のある島に着いた二人ですが、彼はこの女性が亀姫と知り、結婚するのです
ここでまたまた補足。

[蓬莱山は、中国古代の伝説の島で、霊亀の背中の上にあると伝えられていますので、亀
姫は、この島の支配者の娘だと思われます]

ここでの甘～い生活は、3年続きますが、嶋子クン、とうとう家に帰りたくなり、亀姫に
別れを告げます。

亀姫さん、「永遠に一緒に暮らすといったじゃないの、私を棄てる気！」と罵るのですが、
結局は離婚を承諾、別れに際して、嶋子クンに玉櫛笥を渡して、もう一度会いたいと思う
なら開けちゃダメよと言うのですね。

かくして故郷に帰ってきた嶋子クンの前には3年前の村はなく、様子を尋ねても、それは
300年も前のことと聞いてガックリ。つい、開けちゃあダメよと言われていたのを忘れて、
蓋を開けちゃうのですね。この辺りは、浦島太郎の歌と同じですね。

(教訓：イケメンさんはいつの時代もアホが多いのです)

すると、「芳欄之体 率于風雲 翩飛蒼天」。

この部分、解釈が分かれているようですが、私の理解する範囲では、イケメンの嶋子クン
の若くて美しい身体が、一瞬のうちに空に飛び去ってしまったようです。

これも、考えようによってはなかなかすごいですねー。

以上が、風土記の浦島クンの物語。

どうですか？

やっぱり文部省唱歌とは随分違いますねえ。

さて実は、あと一つだけ、浦島太郎物語として中世の「お伽草子」が残っているのですが、
そろそろ、いやになりませんか？

ここまで来たら、いっそ全部聞きたい？

じゃあまた明日。

1.14 御伽草子の孝行息子の浦島太郎クン

三日にわたって見て参りました浦島太郎クンのお話ですが、いよいよ最後に、「御伽草子」の浦島太郎クンのお話です。

その前に、文部省唱歌との差を確認するために、ここまでの三つの古典のお話のまとめをしておきます。

第一、浦島クンは亀を助けたりはしていない。

(亀さんは全く出てこなかったり、出てきても釣られるだけ)

第二、出てきた亀さんは、神様の娘の化身。

(なにせ、万年も生きるのですから)

第三、蓬莱山は、どうも海の中ではなくて、島にあるみたい。

(日本書紀だけが「海に入り」としているけど)

私が子供の頃、海の中じゃ、太郎クン生きていけないよね、と思った疑問はそうおかしくはなかったのですね。

第四、神様の娘を裏切ると怖ろしいことが起きる。

さて、浦島クンの物語、8世紀から時代がずっと下がって、室町時代の「お伽草子」に再登場するのですが、ここで、ぐっと浦島クンは私たちの身近な存在になるような気がします。

文部省唱歌で出てくる「浦島太郎」という名前は、このお伽草子で初めて出てきますし、「竜宮城」も、ここで初めて登場するのです。

そういう意味では、「唱歌浦島太郎」の元は、お伽草子ということになるかも知れませんね。

では、「お伽草子」のまたまた勝手なダイジェスト。

お伽草子の「浦島太郎クン」は、心優しい、親孝行の息子。

この点、イケメンで、チャライ風土記の浦の嶋子クンとはちょっと違う。

その太郎クン、ある日、釣りをしていて亀を釣ったのですが、鶴は千年、亀は万年というのに、ここで命を落とすのは可哀想と思い、逃がしてあげるのです。

すると、次の日、また釣りに出た太郎クンのところに、小舟が近づいてくるのですが、その舟には美しい女性が乗っていました。

彼女は、乗っていた舟が難破し、漂流していると説明し、自分の故郷に送って欲しいと言うのですが、心優しい太郎クン、10日もかけて彼女を送り届けるのですね。

着いた先は、竜宮城。

(といっても、竜宮城は陸地にあって、鯛やヒラメの舞い踊りはないんですがね。)

太郎クン、彼女にほだされて、結婚し、夢のような暮らしをするのですが、3年経って、残してきた両親のことが気になり、30日でもいいから帰りたいと言うのです。

彼女曰く、「今別れなば又何時の世にか逢ひ参らせ候はんや」

(勝手な訳…大阪弁)

「今別れたらな、こんつぎ、いつ会えるかわからへんやん。(行かんどいて)」

とさめざめと泣き、自分は太郎クンに助けられた亀だと告白するのです。別れに際して、「これは、自分の形見だと思ってください。決して開けてはなりません」と玉手箱を渡すのですが、これを開けてしまうのは、他の物語と同じです。

でもね、最後が決定的に違うのですよ。

他の物語では、太郎クン、死んじゃったり、老人になったりするのですが、お伽草子では、ジャン！

太郎クン、鶴に姿を変えて、蓬莱山に飛んでいき、そこで亀さんと再び出会い、300年の間仲良く暮らすのです。

え、どうして300年かって？

えーと、お伽草子では、竜宮城と一緒にいた間に、元の世では、700年経っていることになっているんですね。鶴は千年生きると言われていますから、私の計算では、 $1000 - 700 = 300$ 年。

ということなんですよ。

めでたし、めでたし。

でも、これだけどうして結果が違うのか？ って思いませんか？

この点に関するお伽草子の説明。

「唯人には情けあれ、情けのある人は行く末めでたき由申し伝えたり」

パイレーツ・オブ・カリビアンのように死んじゃうか、鶴になってめでたしとなるかは、チャライイケメン人間か、心優しい孝行息子かで決まるみたい。

皆さん、周りには優しくするように努めましょうね。

もう遅いかもしれないけど。

1.15 文部省の浦島クン

さてどうでしたか？

最後の御伽草子では、亀さんが出てくるし、その命を救ってやることになってるし、竜宮城も登場するし(陸上だけ)、玉手箱もある。何より浦島太郎という名前が同じ、とくれば、これがまあ一番文部省唱歌に近いですかね。

しかし、明治の文部省が困った(であろう)のは、約束を破って玉手箱を開けても、結果がハッピーエンドなこと。

新しい国を支える真面目な国民を育てるに当たって、「良いことをすれば、良いことがある」し、「約束を守らなかったら、報いが来る」という線は崩せないから、これじゃあ、教訓にならないなあ、と考えた挙げ句、仕方なく、この一番大切な部分を無視して、改ざんすることにしたんですね(これ、私の妄想)。

万葉集のように苦しみながら死んじゃうことにすると、大人たちは約束をしょっちゅう破るのに、どうして、あんな風にはならないのって子供たちから追求されるのも辛いし、かといって、約束破っても、ハッピーエンドはマズイし、ええいとばかり、ここは中途半端に白髪の老人にすることで、誤魔化したんですよ、きっと。

いつの世もお役人はセコイ！のです。

ところで、「浦島太郎 100 周年」のお話をブログに載せたところ、ある方からご指摘のあった「亀の宇宙船」説。

こういう古代ロマンってのは、私、好きなんですよ。

いや、実は真面目な話、アインシュタインの相対性理論によりますと、運動体に流れる時間は静止体の経過時間より相対的に遅くなることがわかっています。この結果、運動体のスピードが光速と同じになると時間が止まることになります。

従って、光速の宇宙船に乗って3年かかって地球に戻ると、地球ではものすごく時間が経っていることになります。

この現象のことを物理学では「ウラシマ効果」と呼んでいるんですよ。ホント。

やっぱり、古代には、日本にも宇宙人が来ていて、嶋子クンも太郎クンも、宇宙船で拉致されたのでしょうかね。

そういえば、竹取物語のかぐや姫さんも、最後は、宇宙船で帰っていきまっせ。

このウラシマ効果に支えられた「亀の宇宙船説」も魅力ある考え方なんだけけど、10年ほど前、テレビの拉致報道を見ていて考えた私の仮説。

実は、チャラオの浦嶋子クン、当時大陸にあった北の国の絶世の美女スパイに騙されて、拉致されちゃう。

彼、アホなイケメンだから、喜び組の女の子達に囲まれて、わが国の海岸防衛情報をベラベラ喋っちゃうんですね。

そのうち、わが国では、どうも浦嶋子が拉致されたらしいと問題になる（なんせ日本書紀でも書かれるくらいですからね）。

北の国のデブの専制君主も、これはマズイ、ということで、帰国させることにしたんだけど、今度は逆にこちらの国の状況をべらべらと喋られてはかなわない。

そこで、持たせたのが、開けると爆発する仕掛け爆弾が内蔵された玉手箱。

人間、開けるなよ、といわれれば、開けたくなるのが人情というもの。

もう一度喜び組の彼女に会えるかも一、と開けてしまったが最後、玉手箱は爆発、身体は飛散。

やっぱり、「ならぬものはならぬ」、「ただより高いものはない」というのが、残された教訓。というのはどうでしょうかね。

文部科学省推薦のお話にならないかなあ。

北の国の「喜び組」の写真...鯛やヒラメではありません。



1.7 塩昆布と鰐 2…因幡の白兔

♪ おおきなふくろを かたにかけ
だいこくさまが きかかると
ここにいなばの しろうさぎ
かわをむかれて あかはだか

これは、子供の頃、歌ったご存じの「大黒様」（作詞 石原和三郎、作曲 田村虎蔵）の歌の一番。

この歌の元になったお話、知らない方はいないと思うけど、念のため数行でお話すると「いなばのしろうさぎ（稻羽之素菟）」が「おきのしま（淤岐島）」から「いなば（稻羽）」に渡ろうとして、「ワニ（和邇）」を騙して並べ、その背を渡ったのですが、騙されたと知った「和邇」に毛皮を剥ぎ取られ、苦しみ泣いていたところを「大国主神（おおくにぬしのみこと…大穴牟遲神）」に助けられる、というストーリーですね。

このお話、私、素直な良い子だった頃、日本にも昔はワニがいたのかと思っていたんだけど、ちょっと大きくなって、この「ワニ」は「サメ」のこととわかって、ちょっぴりがっかりしたことがあります。

でもね、さらに大きくなってから、ホントは、この話、南方（中国の広西など）から渡来した民話が元になっていて、ウサギは騙されたと知ったワニからしっぽを食いちぎられるのが本家の話なんだと知りました（だからウサギの尻尾は大変短いんだそうです）。

ですからね、もともとは、このお話に登場するのは本物の鰐なんですよ。中国には「揚子江ワニ」など鰐クンが住んでいますからね。

ところが、日本には本物の鰐はいない。このお話をした大陸から来た渡来人さん、聞かれて困るのですね。仕方ないから、とにかく、サメのようなどう猛なヤツとでも言ったんじゃないですかね。

かくして、我が国では、ワニという名のサメのでかいのが誕生するのです。（これは私の妄想。ハ、ハ、ハ）

実は、この「ウサギとワニ」の話によく似た話は、アフリカにもあって、意外と世界的なんですね。

兎は、騙す方にも騙される方にも良く登場するのに、どうしてワニっていつも騙される方ばかりなんですかね。

ワニがアホということで世界は一致している？

さて、問題は、ウサギを救う「大黒様」なんですがね。

これね、歌の題は「大黒様」とあるけれど、お話のなかでは、大国主命（おおくにぬしのみこと）が主人公。

え、「大黒様」と「大国様」は同じじゃあないの？

これね、日本ではいつの間にか、おんなじ神様のようにされているんだけど、元々は別人（神）。

「大黒さん」は七福神の一人で、こちらはホントはインドの神様なんだけど、「大国様」と同一人物と思っている方が多いんですね。

大黒さんって、純粋な日本の神様じゃあないの？

と思った方は、日本の歴史に詳しい方。

イナバの白兎に登場する優しいお方は「大国主命（大国様）」ですもんね。

一方、「大黒さん」の方は、実は、インドのバラモン教の三大神さんの一人「シヴァ」の神。本名「マハー・カーラー」。

「マハー」は「大きい」という意味で、「カーラー」は「黒い」という意味。つまり、「大黒天」。

デッカく、大きくて、色黒のかなりコワイ軍神様なんですね。

でも、このバラモンの怖い神様、中国に来て、なぜか、富貴をもたらす神、食べ物をもたらす神に変身しちゃうんですね。

大黒天さんの本来の役目は、戦闘神なんだけど、最澄さんが日本に紹介したときも、元々コワイ軍神様であることは内緒にして、変身したまま、富と食べ物の神様「大黒さん」にしちゃった。

七福神の大黒さん、金の小槌と大きな袋を持って米俵にまたがってるでしょ。

怖ーい戦さの神様も歳をとると、やっぱり武器よりお宝の方が力があると思うんですかね。



ちなみに、どうでも良いことだけれど、

大黒さんの袋の中身は、何か知ってます？

これは「七宝」。つまり金、銀、瑠璃（るり）、玻璃（はり）、シャコ、珊瑚（さんご）、
瑪瑙（めのう）。大黒さんは富貴をもたらす神さんですからね。

ところで、紛らわしいことに、大国様も、歌にあるように袋を持っていますねえ。

でも、こちらの方の中身は、彼の沢山の兄達「八十神」からイジメにあって、持たされて
いた荷物が入っているんだそうですよ。

太古の昔からいじめはあったんですねえ。



2.5 亀と兎

♪ もしもし かめよ かめさんよ / せかいのうちで おまえほど
あゆみの のろい ものはない / どうして そんなに のろいのか

これは、誰もが知っている童謡「ウサギとカメ」の1番の歌詞。

久しぶりに童謡について書いてみようと思ったのは、先日、ニュースの後のあるテレビ番組を見ていたら、今の子供に人気のあるおとぎ話の一番が「桃太郎」、二番が「ウサギとカメ」と言っていたのに引っかけたからです。

私、1番人気の桃太郎の話が好きではないのですが、なんと2番人気も、次にきれいな「ウサギとカメ」とは！ ちょっと落ち込んでしまいました。

「もしもしかめよ」の歌は、明治34年石原和三郎作詞、納所弁次郎作曲で、歌詞はイソップ物語の「亀と兎(The Tortoise and the Hare)」をほぼそのまま取り込んだものです。

「tortoise」は「陸カメ」のこと、「hare」は「野ウサギ」のことです。

「turtle」、「rabbit」ではありません。

直接イソップ寓話を読まれた方は少ないと思いますが、ギリシャ語版はともかく英語版にしても10行足らず。面倒なので、岩波のイソップ寓話集226をそのまま掲げておきます。

「亀と兎が足の速さのことで言い争い、勝負の日時と場所を決めて別れた。さて、兎は生まれつき足が速いので、真剣に走らず、道から逸れて眠り込んだが、亀は自分の遅いを知っているので、弛まず走り続け、兎が横になっている所も通り過ぎて、勝利のゴールに到達した。素質も磨かなければ努力に負けることが多い、ということはこの話は説き明かしている。」

この話のオチは、油断大敵が教訓となっていたり、毎日コツコツ努力すればなんでもできるようになるというところにあるようです。ちなみに英語版のイソップでは、この部分は、**Slow but steady wins the race.** となっています。

でも、私のような素直ではない人間は、たちまち幾つかの疑問がわいてきてしまいます。

第一の疑問。「亀と兎が足の速さのことで言い争う」？ これはどう見ても亀は自らを知らないアホとちゃうか。

第二の疑問。「勝負の日時と場所を決めて別れた」？ どうしてすぐ決着しなかったの？ さては亀のヤツ、何かたくらんだな？

第三の疑問。「どうして道から逸れて眠り込んだ」？ ゴール地点で寝ればいいのに？

これらの疑問については、私だけではなく、疑問を抱いた大人が多かったらしく、「亀の計略説」が真面目に唱えられていますね。

その代表は、「リーマスじいやの話」。

え、それ、どういう話かって？

ご存じない方のために、超短縮して話しますと、

亀は、家族を総動員。自分は、前の日に出発してゴール地点で兎を出迎えることとし、出発地点には奥さんをやって、一緒にヨーイドンしたように見せかけるというもの。

これじゃあ、兎は居眠りをしなくても勝てませんねえ。



続いて、亀のTKO勝ち（テクニカル勝利説）論。

言い争いのあと、すぐにレースをすれば、圧倒的に兎の優位は動かないですね。

そこで、亀が立てた作戦は次の通り。

亀は、兎が夜行性で、昼はすぐ眠りこけることを知っていたので昼間にレースを設定したこと。

ゴール地点を広い空地のある場所にしたこと。

ゴール手前で居眠りに都合のいい場所が沢山あるコースを選んだこと。

臆病な兎は、周りから見える所ではじっと寝てなんかられない。

ですから、早く着いて危険なところで待つよりは、手前の安全なところで寝られるようにしたのですね。なにせ、ゴール地点には何するか分からない審判の狐クンがいたのですから。

ところで、こんな疑問を考えない真面目で素直な読者の方には、次のような結末が待っています。

イソップ寓話では、この話のすぐ後に、「亀と鷺(230話)」が置かれています。

兎との競争に勝って、意気上がる亀クン。続いて空を飛びたいと思って、鷺に頼んで、身体を掴んで空高く舞い上がってもらい、離してもらおうのですが、亀はやはり飛べなくて、岩の上に落ちてわれて死ぬというお話。

兎に勝って「なんでも努力すればできる」と思い込んだ亀の哀しい最後です。



FABLE V.

The Tortoise and the Two Crows.

もう一つ、これはかなり知られていますが、坪田譲治の「日本むかしばなし集二」の「負けうさぎ」のお話。

亀に負けて帰ってきた兎は、仲間の面汚しとして兎の村から追い出されるのですが、偶々、狼から子ウサギを出せと言われ困り果てていた村の兎達に代わって、狼の所に行き、狼を殺して、元の村に戻れたという話です。

詳しくは「負けうさぎ」を読んでもらうとして、簡単に申し上げますと、狼に、子ウサギと一緒にここまで来たけど、子ウサギが怖がっているのを向こうを向いていてくれれば連れてくるといい、騙されて、後ろ向きになった狼を崖から突き落とし、晴れて村に帰ることができたというものです。

う～～ん。おとぎ話も最後までたどって見ると、なかなか大変ですなあ。

2.28 一寸法師名称異説

♪ 指に足りない 一寸法師 小さいからだに 大きな望み
お椀の舟に 箸の櫂 京へはるばる 上りゆく

これは、ご承知、童謡「一寸法師」の一番の歌詞。

作詞者は、巖谷 小波。

実は、彼が、今我が国で知られている童話、良い子風「一寸法師」の実質的作者。

「一寸法師」の原作は、浦島太郎などで有名な「御伽草子」なんですがね。

実は、御伽草子の一寸法師クンの方は、ちょっと狡賢しくて、とても「日本昔噺」にはふさわしくないケシカラン男で、目的を達成するためには嘘ついてもしれっとしているのだけれど、やるときはやるから、どこかの国のハトぽっぽ総理よりマシな男。

ところで、小人に関する童話は、世界中にあって、女の子ではアンデルセンの親指姫、男の子ではグリムの親指小僧、フランスのペローにも親指小僧がありますね。中国にももちろんあります。

その殆どが、小人の主人公の冒険譚。

普通の大きさの身体の間人では経験できない世界がスリルとともに展開され、様々な困難を乗り越えて成長していくものが多いですね。

胃袋の中に飲み込まれる緊急事態が起こるのは、一寸法師さんと共通しているのですが、一寸法師さんと違って、最後まで身体は小人のままだし、一生懸命自分の頭を使って困難を切り開いていく。

ところがです、御伽草子の一寸法師さんの場合は、彼らと違って、とにかく普通の人並みになりたいと思うところが強く、頭もそのために使うので、かなり狡猾なんですね。で、最終結末も、身体も大きくなって立身出世してメデタシ、メデタシ。ここが他と違う。

さて、巖谷小波クン、御伽草子の些か狡い一寸法師は、どうも世界の他の小人物語と比べて見劣りがする、と思ったのか、原作をよい子風一寸法師に大幅改竄するのですね。

童謡まで作っちゃって、彼のコスカラくて、厭らしい性格をひた隠す。

これがまんまと成功。

今や、一寸法師クン、可愛いイメージが定着し、小さな身体ながらも果敢に姫君を守る好青年。

これ、明治政府の教育上の陰謀みたいな気もするけど、それはそれで、またいつか話すこともあるでしょう。

ところでね、彼、どうして僧侶でもないのに、一寸「法師」っていうのか、不思議に思ったことありません？

ないなあ、という人は、ホントに素直で、やさしい子供だった人。

ある、あるという人は、私と同じ、教師から、イヤな子供と思われたに違いない人。

法師という言葉を広辞苑で引くと、大別して三つの意味が載っています。

第一に、法師というのは、普通は僧侶のことをいいますね。例えば、弘法大師様。でも、一寸法師クンが出家得度した話は聞きませんから、これは違う可能性が高いですね。

第二は、昔、男の子は頭を剃っていて、僧侶と似ていたので、小さな男の子の意味。

これは、幼い男の子→「坊や」→「ぼう」→お坊さん→法師。

私、子どもの頃「おさぼう」と呼ばれていたのですが、この「ぼう」はこれ。

私の場合、とくに「ええとこ」のおぼっちゃん。ウソです。

この第二の意味だと、身の丈一寸の坊やの意味になります。

しかしね、お椀の舟に乗って上洛する頃は、一寸法師クン、身体は小さいけれど、もう大人の歳だし、絵で見る一寸法師クン、どれ見ても頭剃っていないんですね。

ちなみに、一寸法師と関係ないけど、ひとりぼっちの「ぼっち」も「独り法師」からきたもの。宗派に属していない僧侶という意味ですね。

不思議なことに、「ぼっち」は、同じ法師から来ているのに、一寸法師と反対に、大男の場合に使いますね。「だいだらぼっち」とか、「高ぼっち」とか。

第三に、最後の用例として、広辞苑では、「ある語に添えて「人」の意を表すときに用いる。」というのがあります。影法師などがその使用例。

これだとすると、一寸法師は、一寸の背丈の「人」の意味。

通説はこれ。

さて、皆さんは、どれだと思います？

御伽草子によれば、生まれて始めに、彼にこの名前がつけられた理由は、第二説。

「生まれ落ちてより後、背一寸ありぬれば、やがてその名を一寸法師と名付けられたり。」老媪が41歳になって生まれた子だから、はじめは猫かわいがりしたんでしょうね。

「身の丈一寸の可愛い坊や」とでもいう感じですかね。

さて彼が大人の年齢になってからは、坊やでもないから、第三説が通説にされている。

でもね、私は、少しだけへそ曲がりなので、第一説も捨てがたいと思っていますのです。

理由？

ちょっと長くなるけど、聞く？

もともと「御伽草子」の一寸法師って、いつまで経っても背が伸びないために、生み育てられた老夫婦から、役に立たない人間として、疎まれだして、そのために家を飛び出して都に上り、立身出世を目指すのですね。

ところで、この「御伽草子」ができた時代、僧侶と称するのは自由でした。(平安時代の昔は、僧侶になるには厳しい資格が必要で、勝手に僧を名乗れなかったのですが。)つまり、スネかじりの「プータロー」クンでありながら、メンツを気にする者は、みな自分を無職といわずに、僧侶と自称していたようなんですね。今で言う「フリーター」。

老夫婦の家にいた頃から無職で、その後、家を出て、宿無しになった後も、ずっと、無職だった彼は、都の三条の大臣の玄関に立ったとき、自分を子供の時のままの「一寸坊や」と名乗った訳ではなかったんですね。

ちょっと格好つけて、自分は小さいけれども法師なんだと称したに違いないと私は思うのです。

歳をとって青年になってからの彼は、自称法師だったんですよ。きっと。

やっぱりこれも妄想かな？

3.30 モンクロチョウ？

♪ ちょうちょう ちょうちょう 菜の葉に止まれ / 菜の葉に飽いたら 桜に止まれ
桜の花の 花から花へ / 止まれよ遊べ 遊べよ止まれ

これは、誰でも一度は歌ったことのある童謡「ちょうちょう」の一番。
明治 14 年に出された日本で初めての唱歌集に載っているほど古い童謡なのですが、原曲は、ドイツの「Hanschen klein」（幼いハンスちゃん）という「蝶々」とは何の関係もない子供の旅立ちの歌です。

この歌、明治 14 年の唱歌集では、今と違って、次のようになっていました。

♪ 蝶々 蝶々 菜の葉に止れ / 菜の葉に飽たら 桜に遊べ
桜の花の 栄ゆる御代に / 止れや遊べ 遊べや止れ（野村秋足作詞）

見てすぐわかるように、今のものとは後段が大きく違っていますが、これは敗戦後に GHQ に媚びた文部省の仕業。言われもしないのに、桜の花が栄える御代を差し替えたのですね。

まあ、昔々から、文部省って役所は、上から下まで「長いものには巻かれていましょうね」というところですから、これは、まあ、省（しょう）がないかなあ。

ところでね、今日、問題にしようと思っているのは、別のところ。

え、このところめげていたのに、イチャモンつけられるほど元気になったのかって？
余計なお世話ですよ。

この歌の蝶々、どうして、桜の方は「花」に止まれと言ってるのに、菜の方は「花」じゃなくて「葉」なのかなあって思ったことはありませんでした？

私ね、小学校の頃、菜の方も「花」だと思い込んでいて、「菜の花に止まれ」って歌っていたんですね。でも、あるとき、なんか友達の歌っているのと違うなあと気付いてよく見ると、「葉」。

えー、どうして葉？

もともと気の弱〜い私、先生にも聞けず、ウツ、ウツ、モン、モンの毎日。

ア、ハ、ハ。 ウソです。

大学生になって、ある本を読んでいたら、モンシロチョウは、アブラナ科の葉に卵を産むとあったのですね。葉に止まるのは、産卵のため！

長年の疑問？は、一挙に解決。と言いたいところだったのですが、
じゃあ、桜の花に止まるのは「蜜」を吸うため？



これ、妙に気になっていたのですが、数年前に読んだある研究者のレポートによると、「モンシロチョウは、桜の花に止まることはない」と御断言されていたんですね。

えーっ、

じゃあ、この歌詞は？

そういえば、よく読めば、原作は、「桜に遊べ」としか言ってませんねえ。

これは、戦後の改ざんの時に、モンシロチョウも桜の花に止まると思い込んでいた文部省のお役人さん、調べもせずがいい加減に書いたようですね。

実は、この研究者の方によると、私のような蝶々の素人には、一見すると見分けが付かないようですが、紋白蝶と姿形がよく似た「スジグロ白蝶」という蝶がいて(そう思うとよく見かけます)、こちらは桜の花に止まるのだそうです。

私達が桜の花に止まっているモンシロチョウを見たというのは、まずこれだそうです。



さて、桜の花には止まらないモンシロチョウの方ですが、これ、ご存知のように、白い羽根の中に黒い紋がありますね。紋白蝶は、「紋が白い」のではなく、「黒い紋」の「白い蝶々」ですよ。

桜に止まる「スジグロ白蝶」ってなにか珍しい蝶々のように聞こえるけれど、「黒いスジ」がある「白い蝶々」だから、モンシロチョウとの違いは、「黒い紋」か「黒いスジ」かの違い。飛んでるとちょっと目にはわかんないですよ。

実はね、モンシロチョウは、最初、「紋黒白蝶」と命名されていたんですよ。ホント。ところがね、誰かエライ人がこれじゃあ言いにくいねといったために、「黒」が省かれて「紋白蝶」になっちゃった。

それなら、同時に、さっきの「スジグロ白蝶」も「スジ白蝶」としとけば良かったのに。

そう思いませんか？

それなら、ひょっとするとズボラな文部省のお役人さんも間違えないで済んだかも。

ところで、紋白蝶は、英語で「**Cabbage White**」。

向こうでも、アブラナ科のキャベツに卵を産むんですね。

♪ 蝶々、蝶々、キャベツに止まれ、キャベツに飽いたら、ポテトに遊べ(米国編)、ですかね。

ちょうちょうさん、アブラナ科だからと言って大根と間違えて足に止まらないようにね。

ところで、早春に咲く「座禅そう(またの名を達磨草)」の英名は、「**Skunk Cabbage**」。

同じキャベツでも強烈な臭いがすると、こんな名前が付いちゃうのですねえ。



名前ってなかなか面白いですねえ。

3.31 ちょうちょうとすずめ

先の話に出た「ちょうちょう」の歌ですが、戦後の文部省による改訂の時、もともとは四番まであったこの歌は、一番を残して消されてしまっているのです。

二番は「雀」、三番は「とんぼ」、四番は「燕」だったのですが、今では、このことを知っている人は、少ないようです。

ちなみに、元の二番は、

♪ おきよ おきよ ねぐらの雀 / 朝日の光の さきこぬさきに
ねぐらをいでて 梢にとまり / あそべよ雀 うたへよ雀 (稲垣千颯作詞)

二番がなぜ雀なのか、その作詞者が一番の作詞者と違うのはなぜか。
元のこの歌は、よくわからないことが多い不思議な歌なのです。

ところで、最近、私の家の近くでは、雀を見なくなりました。
以前は、どこにでもいた雀を、この頃は見つけるのがなかなか難しいのです。
カラスに追われてしまったのですかね。

でもね、どうも、これ、大都会だけのことではないようで、数年前に、北海道でも激減しているという報道がありましたし、イギリスでも激減しているというニュースをみたことがあって、しかも、その原因はわからないって、コメントがついていたものだから、これ、ひょっとして日本版「沈黙の春」？ って心配してたのですね。

雀は、昔から人の生活にすぐ近くにいることもあって、童話や歌や俳句にはよく出てくるのですが、不思議なことに、和歌の世界では余り登場しないのです。
なぜでしょうかね。
では、数少ない雀の和歌から一つ。

呉竹に ねぐらあらそふ 村雀 それのみ友と 聞くぞさびしき

[拙訳]

(庭に生えている呉竹に、ねぐらを求めてちゅん、ちゅん騒いでいるすずめたち。あなた方の鳴き声だけが話し相手の今の私。もう、みんな向こうの世に行ってしまった寂しい思いをしています。)

この歌の作者は二条院讃岐。
といわれても、それ誰？ ですね。

彼女は、源三位頼政の娘。
源三位頼政は、平家全盛の頃、源氏でただ一人、三位の公卿の地位に昇ったものの、治承

4年、以仁王と平家に叛旗を翻し、敗死しています。（戦「源三位頼政」参照。）
彼女は、このとき父と兄を同時に失ったのですが、自分には、もう誰も友がないと言う彼女の傍にも雀はいたのです。

ところで、村雀といえ、口が卑しい私は、なんと言っても倉敷の銘菓「むらすずめ」。
これは好きですねえ。写真。



あ、思わず話がそれてしまいましたが、私が雀といわれてすぐ思い浮かべるのは、源氏物語の「若紫」。

源氏が、幼い頃の紫の上と初めて出会うシーンですね。

幼い若紫が、泣きながら尼君に訴えるところ。すごく可愛い。

「すずめの子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちにこめたりつるものを」

（わたしが折角捕まえた雀の子をいぬきが逃がしちゃったの。籠を伏せていれてあったのに）

そういえば、昔、幼い頃、ざるとお米を使って、雀を捕りました。

警戒心の強い雀は、なかなか捕まりませんでした。じっと遠くから、糸を握って待っていたのは懐かしい思い出です。

金子みすゞさん、ゴメンナサイ。

6.4 雨降りとお月さん

今日は、久しぶりに、童謡の話をしてみます。

四月、五月は、いろんな花が咲いて、童謡や歴史の話をする間がなかったけれど、雨の季節になったから、少し方向転換。

今日は、五月雨にちなんで雨に関連する童謡。

♪ 雨 雨 降れ 降れ 母さんが 蛇の目で お迎え 嬉しいな
びっち びっち ちゃっぷ ちゃっぷ らん らん らん

子供の頃、この歌を聞いたことがある人は多いと思います。

これ、歌詞を知っていても、題名を答えられる人は少ないのですが、題名は「あめふり」。大正 14 年に、北原白秋が作詞、中山晋平の作曲、黄金コンビで作られました。

昭和 40 年代のはじめ頃まで、私たちは、この歌の通り、傘を持たないで、雨に降られた子供達や仕事から帰ってくる父親を、学校や駅まで傘を持って迎えに来てくれた母親の姿を、実際に見ていたのですが、昭和 30 年代初めまでは、この歌のように母さんが差していたのは蛇の目傘。



今、私たちの普段の生活で和傘を見ることは、稀になりました。

ですから、今の子供がこの歌を聴くと、「母さんが 蛇の目で お迎え」というところで、怪奇物語かと思うでしょうね。

しかし、私が子供の頃、まだ和傘は普段の生活で使われていました。

先ほど、念のために、傘の生産量を調べてみたのですが、明治期に洋傘が入ってきているのに、戦後になっても、まだしばらくの間、和傘の生産は洋傘を上回っており、意外なことに、番傘などの和傘の生産のピークは、昭和 10 年代の前半なのです。

当時、和傘は、洋傘の 3~6 倍の生産量がありました。

しかし、昭和 30 年代に入ると、洋傘の生産が和傘を圧倒し始めます。

軽く、破れることもなく、なんと言っても、安くなったためだと思います。

ところで、この「あめふり」の歌が作られたのと同じ大正 14 年、もう一つの有名な童謡「雨降りお月さん」が作られます。

♪ 雨降りお月さん 雲の蔭 お嫁にゆくときゃ 誰とゆく
ひとりで傘（からかさ） さしてゆく

この歌の作詞者は、野口雨情。

実は、雨情は、この歌が作られるまでに二人の娘を亡くしています。

明治 41 年 3 月、長女みどりは、生まれてすぐの 7 日目でした。

大正 11 年、発表された「しゃぼん玉」の二番の歌詞

♪ しゃぼん玉消えた 飛ばずに消えた 生まれてすぐに こわれて消えた

この歌詞は、長女みどりを想って作られたという逸話が残されています。

雨情には、大正 10 年に授かった次女恒子は、どうしても健やかに育ててもらいたいという願いがあつたに違いありません。

にもかかわらず、彼女もまた、2 歳 10 ヶ月でこの世を去ります。

「雨降りお月さん」は、雨情が、幼くして亡くなった次女恒子さんの嫁ぐ様子を夢み、そこに付き添えない自分の寂しい心を、「ひとりで唐傘を差していく」と歌ったと思えるところがあるのです。

この歌の歌詞が、めでたいお嫁入りなのに、たった一人で嫁いでいく花嫁の寂しい様子が歌われることには、雨情の心が映されているとしか思えないのです。

最後に、幕末、京都で活躍した土佐藩士「武市半平太」をモデルにした新国劇「月形半平太」の名場面。

雛菊 月さま、雨が…
半平太 春雨じゃ 濡れてまいろう

この初演は大正 8 年。二人の間には、目に見えぬ和傘が差されています。

これが、坂本龍馬クンであれば、ブーツにこうもり傘。
お龍さんとの相合い傘ということになるのでしょうか。

6.9 桃太郎のその後

- ♪ 桃太郎さん、桃太郎さん、お腰につけた黍團子、
一つわたしに 下さいな。
- ♪ やりませう、やりませう、これから鬼の征伐に、
ついて行くなら やりませう。

これは、文部省唱歌「桃太郎」の一番と二番。
普通、私たちが桃太郎の歌として聞いているのは、この二番までです。
NHKのみんなの歌でも、三番以下が歌われることは余りありません。

私たちは、確かに、子どもの頃、桃太郎の歌を聴いたはずですが、三番以下を歌えるという方は、非常に少ないのではないのでしょうか。

どうして？

それは、三番以下の歌詞を見ればわかります。

- ♪ 行きますせう、行きますせう、あなたについて何處までも、
家來になって 行きますせう。
- ♪ そりや進め、そりや進め、一度に攻めて攻めやぶり、
つぶしてしまへ、鬼が島。
- ♪ おもしろい、おもしろい、のこらず鬼を攻めふせて、
分捕物を えんやらや。
- ♪ 萬萬歳、萬萬歳、お伴の犬や猿雉子は、
勇んで車を えんやらや。

正直申し上げて、私は、昔からこの桃太郎の歌が嫌いです。
嫌いというだけでは大人げないのですが、桃太郎は、そもそも古典に基づいた話ではなく、
成立が室町時代と言われているにもかかわらず、お伽草子にも載っていないのです。
きちんと調べていないのですが、ものの本によれば、江戸時代の半ば過ぎに子供向けの赤
本に載ったのが最初と考えられているようです。

実は、桃太郎の話は、全国各地に何十カ所もあって、それぞれ内容が違いますし、桃太郎
の性格も、「気は優しくて力持ち」から「手のつけられない乱暴者」「ものくさでまじめ
に仕事をしない男」まで様々で、必ずしも定番がないのです。

そんな桃太郎を政府公認の立派な人間に仕立て上げたのは、巖谷小波の「日本昔噺」叢書。
これは 1894～96 年にかけて刊行され、日清・日露の戦意高揚に使われました。

この中で、桃太郎は、爺と婆にこう言っています。

「日本の東北の方、海原遙かに隔てた処に、鬼の住む嶋が御座ります。其鬼、心邪にして我皇神の皇化に従わず、却て此の芦原の国に寇を為し、蒼生(人民)を取り喰い、宝物を奪い取る、世にも憎くき奴に御座りますれば、私只今より出陣致し、彼奴を一挫に取って抑へ、貯へ置ける宝の数々、残らず奪取て立ち帰る所存。……」

つまり、桃太郎は、天皇の方針に従わない、につくき奴らを征伐するための聖戦をしに行く皇国の戦士であるとされたわけです。

ですから、各地の民話のうち、都合の悪い部分は、全て切り捨てられ、その中から、当時の明治政府にとって、都合の良いところが文部省唱歌「桃太郎」にサマライズされたと思われまます。

例えば、

それまでの各地の民話では、流れてきた桃を食べて元気になったお爺さんとお婆さんが「チョメ、チョメ」して桃太郎が生まれたという回春ストーリーが圧倒的に多く、桃がドンブラコと流れてきてその中からオギャアというものは少数だったのです。

でも、子供向けの戦意高揚の話の中にチョメチョメは不適當として、巨大な桃がどんぶらこという怪奇物語にしてしまったのですね。

ですから、桃太郎は、国のために尽くす文武両道にすぐれた快男児でなければならなかったし、これ以降、桃太郎の姿も、戦支度をし、日の丸の鉢巻きを巻き、聖戦を示す旗を掲げ、犬、猿、キジが仲間から家来に格下げされます。

こういう絵、見たことあるでしょ。



鬼ヶ島に奇襲攻撃を仕掛けるのも、何の問題もない正しい戦とされます。

真珠湾の奇襲を仕掛けたのは、不思議でもなんでもないので。

これに対して、福沢諭吉は、自分の子供に向けた家訓『ひまのをしえ』の中で、桃太郎を大変卑劣な人間として激しく非難をしていますし、芥川龍之介に至っては、短編小説「桃太郎」の中でパロディ化した形で、侵略略奪者としての桃太郎を皮肉っています。

さて、宝物を車に積んで凱旋した桃太郎達のその後ですが、

「お爺さんとお婆さんと桃太郎の三人は、宝物のおかげでしあわせにくらしましたとき。」
という童話の世界とは違って、

芥川龍之介の桃太郎では、次のように書かれています。

「しかし桃太郎は必ずしも幸福に一生を送った訣ではない。鬼の子供は一人前になると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐電した。のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡って来ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとした。何でも猿の殺されたのは人違いだったらしいという噂である。」

日本が、中国戦線で直面した事態が予想されているようで、ため息が出てしまいます。

6.23 七つの子

昔、仙台勤務をしていた頃、カラスがクルミを道路において、通る車に轆かせて固い殻を割るという技が新聞に書かれて、話題になったことがありました。

実は、私も、大学に通うルートに当たる扇坂のT字路のところで、この光景を目にしたことがあり、ひょっとしてカラスはアホな学生より頭が良いんじゃないかなんて思ったことがありました。

このカラスは、ハシぼそカラス(嘴細鳥)という種類で、都会でゴミを漁るハシぶとカラス(嘴太鳥)とは違う種類。専門家によると、ハシぶとより頭が良いそうです。

目が悪い私には、「ハシぼそ」か「ハシぶと」かを見分けられるほど接近するのが難しいカラスクンですが、この二つは、地上を歩くスタイルで見分けがつきます。

ハシぼそクンは左右の足を代わる代わる出して歩くのに対して、ハシぶとクンは、びよんびよんと跳ねるような歩き方をします。

ゴミ置き場で見るとカラスはびよんびよん跳ねてるでしょ。

さて、ハシぼそクンのねぐらは里山にあって、夕方になると、三々五々里山に帰っていきます。

この光景は、昔から変わらず、枕草子の次のくだりは有名ですね。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとして、みつよつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。

これ、ハシぼそクン達なんですね。

ついでに、誰もが知ってる「七つの子」。

♪ 鳥 なぜ啼くの / 鳥は山に / 可愛い七つの / 子があるからよ
可愛 可愛と / 鳥は啼くの / 可愛 可愛と / 啼くんだよ
山の古巣へ / 行つて見て御覧 / 丸い眼をした / いい子だよ

これも、ハシぼそカラスくん。

決して、ハシぼそクンは、カラスの勝手でしょ なんて言いません。

ところで、この「七つの子」は、野口雨情作詞、本居長世作曲なんですが、昔から「七つの子」という言葉を巡って決着のついていない大論争があるんですね。

知ってました？

私が小学生の時に習ったのは、山の古巣には、「七羽」のヒナカラスが待っているという

光景。

(「七つの子」が初めて発表された「金の船」の創刊号(大正10年(1921年))には、堂々と七羽のカラスが並んでいるのです)



ところが、鳥類学者の研究では、カラスが一度に産む卵は、最大でも5個。そのうち、ヒナになるのは2~3羽なので、7羽というのは現実にはあり得ない。

えー！ そうなの？

そこで登場するのが、七つ(七歳)の子カラス説。

ところが、これも、鳥類学者からあっさり却下。

カラスの寿命は、自然の中では長くて10歳。

7歳のカラスは、人間なら70を超えたジジババガラス。

どうなってんの？

って言いたくなりますね。

どうも、野口雨情くん、いい加減なところがあるようで、見てきたような嘘を歌詞に残す方ですから、私も、あまり真剣に考えるつもりはありません。彼の手になる「波浮の港」には、鶺鴒は住んでいませんし、夕焼けの海は見えないのは有名な話ですからね。

この歌も、カラスくんのごことはどうでも良くて、いつの間にか、彼の頭の中で、子からすくんが自分の子供のことになっちゃったみたいなんですね。

さて、このハシボソカラスくんも、ハシぶとカラスくんも、外来種ではなくて、れっきとした日本古来種。

万葉の時代から、歌に詠われているんですね。

朝からす 早くな鳴きそ 我が背子が 朝明の姿 見れば悲しも (万葉 3095)

[拙訳]

(からすさん、お願いだから朝早くから鳴かないでちょうだい。私のあの人が、もう明け方かと思って、お帰りになるのを見るのは、本当に辛いのだから)

とても、最近、朝のゴミ置き場で騒ぐハシぶとくん達と同じカラスとは思えませんねえ。
とっていたら、枕草子には、

「にくきもの」として「烏の集まりて飛び違ひ さめき鳴きたる」というのがありました
から、昔から変わっていないのかな？

最後に、カラスは英語では「crow」。これ、ラテン語の「corvus」から来ているのだけれ
ど、この「corvus」は「黒い」という意味。単純ですねえ。

向こうにも「闇夜のカラス」という言葉があるのかどうか、調べて見なきゃ。

7.18 シンデレラの靴

またまた、昔のことになるのですが、子供の頃、叔母に「シンデレラの童話」を読んでもらって不思議に思ったことがあります。

私の読んだ童話の元は、今考えると、18世紀フランスの文学者、シャルル・ペローの「Cendrillon ou La Petite pantoufle de verre」。

継母とその連れ子の姉達からいじめられていたシンデレラに、魔法使いから、美しいドレス、ガラスの靴が与えられ、12時までに帰らないと魔法が解けるからと警告を受けて、カボチャの馬車に乗ってお城の舞踏会に行くお馴染みのストーリーです。

12時の鐘を聞いて、お城から駆け出すシンデレラ。

私 アレッ、12時には魔法が解けるんじゃないか？

叔母 実際には鐘がなるのがちょっと早かったのよ。

私 どうしてガラスの靴は、そのままなの？

叔母 そうでないと王子様が探せないでしょっ。(困ったイヤな子ですねえ)

私 ???

このうち1つは、20年ほど前に、ある本を読んでいたときに、やっと謎がとけました。鐘は11時45分に鳴っていたのです。

一日目の舞踏会の時には気をつけていたシンデレラですが、二日目の夜、王子様の腕の中で夢うつつに鐘を聞いて、慌てて駆け出し、辛うじて12時にはお城の館の外で元の姿に戻ったようです。お館は、私たちの家と違って広いですから。

城門のところでは、粗末な身なりのシンデレラが目撃されています。

誰に？ もちろん門番です。

でも、15分おきに鳴る時計など本当にあったのか？

あったのです。この鐘は、町のなかに響き渡る教会の鐘ではなく、舞踏室の置き時計だったと思われます。

ヨーロッパの古い置き時計は15分おきに鳴る仕掛けを持っていたとその本には書いてありました。念のため、本の名前は「シンデレラの時計 角山栄著 ポプラ社」

2つめの疑問は、今も解けていません。

灰かぶり姫のおとぎ話は、世界中に存在し、最も古いのは、エジプトの美しい奴隷の娘ロードビスの物語、中国にも「掃灰娘」の物語があります。

ただ、魔法使い、ガラスの靴、カボチャの馬車が出てくるのは、ペローのものだけで、19世紀にドイツの民話を収集してまとめたグリムの童話のシンデレラにも、魔法使いは出て

こないのです。

でもこの物語は、ガラスの靴がキーポイントで、これがあつたために、シンデレラはお姫様になれたのですから、12時にガラスの靴がぼろ布の靴に戻ってしまったのでは、ハッピーエンドにはならないのです。

グリム童話のシンデレラの場合、靴は魔法使いからもらったものではありませんから、この問題は起こらないのです。

フランス人は、やっぱりドイツ人に比べていい加減なんですかね。

だれか、この疑問を解いてもらえないでしょうか。解いていただいた方には、金一封差し上げます（12時になると木の葉に変わるかも知れませんが、コン）。

今では、私のこの疑問をよそに、シンデレラはますます華麗化し、グリムのシンデレラ物語のように足を切るような恐ろしい部分は、我が国では姿を消して、子供の童話の世界では、ディズニーのシンデレラが日本制圧をなし遂げたようです。

まあ、ディズニーでもいいか。

映画の中の「ビビディ、バビディ、ブー（Bibbidi-Bobbidi-Boo）」の唄も素敵な曲だし。

誰か、私に、呪文をかけてくれないかなあ。



Salagadoola mechicka boola bibbidi-bobbidi-boo / Put 'em together and what have you got
Bibbidi-bobbidi-boo

Salagadoola mechicka boola bibbidi-bobbidi-boo / It'll do magic believe it or not
Bibbidi-bobbidi-boo

Salagadoola means mechicka bolero / But the thingmabob that does the job is
Bibbidi-bobbidi-boo

Salagadoola menchicka boola bibbidi-bobbidi-boo / Put 'em together and what have you got
Bibbidi-bobbidi bibbidi-bobbidi bibbidi-bobbidi-boo

8.5 ここほれワンワン

私のブログ友人のひとりに、自分で作られたマイキャンピングカーで北海道東北を巡っておられる方がいます。

どうも可愛い奥様をほったらかして、温泉と釣り三昧のようで、とても我が家では、考えるだに怖ろしいのですが、それはともかく、数日前の報道では、彼の奈良のご自宅のすぐそばから、卑弥呼さんの時代の鏡が発掘されたようです。

どうも、奈良盆地というのは、どこを掘っても遺跡だらけのようで、卑弥呼さんの鏡も、地元の町の職員が重機で掘削中に、鏡を掘り当てたのはいいのですが、哀れ、鏡は重機で真っ二つだったそうです。奈良は、豪快ですねえ。

いつまでも遊び回っていないで、そろそろ自宅の裏庭でも重機で掘ってみた方がいいのではないですかと思っているのですがねえ。

ところで、土の中からお宝ザクザクと言え、なんとと言っても「花咲爺さん」ですねえ。

♪ 裏の畠で ポチがなく 正直爺さん 掘ったれば
大判小判が ザアック、ザアック、ザック ザク

ところで、この歌、明治34年に石原和三郎の作詞、田村虎蔵の作曲で作られたのですが、細かいことを言えば、些か問題があるのはご承知の通りです。

え、ご承知でない？

では、一時の暑さしのぎと思って聞いてください。

まず疑問の第一は、この歌、いつの時代のことを歌ったのか？

6番の歌詞に（大名の）殿様が出てくるので、正解は、江戸時代？



ところがね、犬の名前は「ポチ」でしょ。

日本で犬に「ポチ」という名前を付けるようになったのは明治時代になってからなんですね。

お雇いフランス人が愛犬を「可っ愛いー」(petit)…プチと言っていたのを、早とちりしてポチって名前と勘違いしたのが原因のようですよ。

まあ、明治に入ってからでも、大判小判が出てくることはあるでしょうけど、大体、お宝を畠に埋めるヤツっていますかね、とまあ、こんな具合に、歌詞は、ハチャメチャなんです、もとの話が江戸時代の赤本ですから、仕方ないですね。

赤本のお話の方では、犬は無名。

江戸時代だと「しろ」とか「くろ」とか呼ばれていて、名前なんかちゃんと付けてもらえなかったからでしょうかね。

ところで、この花咲翁さんのお話は、元々は、中国の江南民話「狗耕田」が伝わったもので、こちらは兄弟の遺産紛争を巡るお話。

莫大な財産を相続した兄に対して、弟は荒れた畠と犬一匹をもらったのですが、犬と一緒に頑張った弟が豊かになっていくのを羨んだ兄が、犬を借りて耕そうとして失敗、犬を殺してしまいます。犬の遺骸が埋められたところからは竹が生え、その竹から金銀じゃらじゃら。最後に灰が宰相の牡丹を咲かせるところまで、そっくりな物語です。

でも、白と杵はでてこないんですがね。

そもそも、この話、結構真面目なところがあって、毎日、汗水垂らして働いていると、豊かになっていき、楽しんで人のマネをしようとしてもそうは行かないというのが、「狗耕田」の言いたいことのようにです。

これは、人のマネばかりして大きくなった今の中国の皆さんに聞かせてやりたいようなお話。

ですからね、日本の花咲翁さん 1 番で、ポチがワンワンと鳴いて宝を手に入れるというのは、そもそも本筋からは外れてるんですね。

灰を撒いて、土壌改良をして、綺麗な花と沢山の実ができるようにするという勤労の大切さを訴えても、今の時代には見向きもされないけれど、私としては、今楽しんで得しているように見える連中、いつかは、灰を頭からかぶってしまうと思っていますがね。

ところで、中国民話にはない「白と杵」。気になりますか？

これね、私の得意な妄想では、杵はオジイさん、白はオバアさん。

日本では、沢山子供を作ることが宝ものだったのですねえ。

でも、白を借りたというのは気になりますねえ。

最後に、明治 34 年に作られたこの花咲翁さんの歌。

1939 年に作られた中国人民解放軍行進曲とメロディがそっくりなんですよ。

you-tube で聞いてみてください。

どっちかが真似た？

そりゃ、真似たとすれば向こうですよ。なにせ、明治 34 年は 1901 年ですからね。

昔、「狗耕田」のお話の方をいただいた手前、曲の方についてとやかく言うつもりはないのですがねえ。

11.8 夕焼け小焼けの赤とんぼ

昨日は夕焼けが綺麗でした。秋の夕陽はどの季節よりも透明感があって、赤くなります。

夕焼け小焼けの赤とんぼの歌の元になった「赤蜻蛉」は、大正 10 年 8 月、三木露風が「櫛の実」に発表したもので、誰もが知っている懐かしい歌です。



[赤蜻蛉]

♪ 夕焼け、小焼けの山の空 負われて見たのはまぼろしか。

♪ 山の畑の桑の実を 小籠に摘んだはいつの日か。

♪ 十五でねえやは嫁に行き お里のたよりも絶えはてた。

♪ ゆうやけこやけの赤とんぼ とまってゐるよ竿の先。

ん、どこか違う？

そうなのです。

「赤蜻蛉」は、「櫛の実」での発表の 3 ヶ月後に刊行された童謡集「真珠島」に収録されるのですが、この僅か 3 ヶ月の間に、重大？な改変（傍線部分）がされているのです。

[赤蜻蛉]

♪ 夕焼け、小焼けのあかとんぼ 負われて見たのはいつの日か。

♪ 山の畑の桑の実を 小籠に摘んだはまぼろしか。

♪ 十五で姐やは嫁に行き お里のたよりも絶えはてた。

♪ ゆうやけこやけの赤とんぼ とまってゐるよ竿の先。

この改変によって、赤蜻蛉の詩は、夕焼けに染まった「山の空」から、「あかとんぼ」に視点が移っています。

また、「いつの日か」と「まぼろしか」を入れ替えることによって、全体が夢のようなおぼろな色彩を強く帯び、なつかしく、淡い幼い頃の思い出に包まれます。

ところで、この赤とんぼの歌詞ですが、

「山の空」から「あかとんぼ」に変えることによって、思わぬ副作用が出てきます。

「(背)負われて見た」を「追われてみた」と誤解する方が続出するのです。

「山の空」だとこのような誤解が生じる余地はありませんが、「あかとんぼ」になると漢字の歌詞を見ない人は誤解しますからね。

今でも、赤とんぼが、誰かに追われていると思っている方がかなりいるのですね。

もう一つ、「ねえや」を「お姉さん」と思っている方も多いのです。

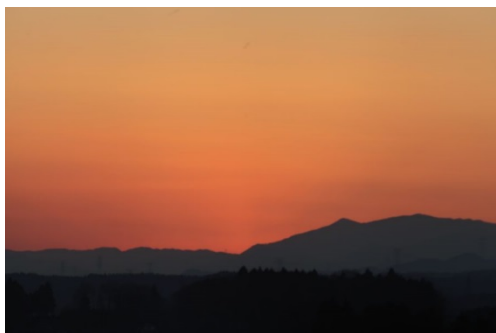
自分の実の姉も「ねえや」と言うことがあるのですが、この場合「姉や」と書きます。

これに対して「姐や」と書くと、この場合子守りとして自分を背負っていた他人の娘さんを指すことになります。このことを明確にするために、「ねえや」を「姐や」に改変したのですね。

最後に、「夕焼け小焼け」の「小焼け」とは何か？

この点については、「夕焼け」の語調を整えるもので、「仲良し こよし」などと同じという解釈が普通のようなのですが、これを、夕日が沈んで暗くなった後に、もう一度赤く光る現象を指すという意見もあります。

この後者の意見に従いますと、最初に作られた「樗の実」の「夕焼け小焼けの 山の空」という言葉が俄然意味を持つてくることになります。



ちょっとした改変でも大きな違いをもたらすのですから、わが国の「ことのは」は繊細なのですね。

♪ 赤とんぼ、羽をとったら、唐辛子。

これは、若い頃の私達が、飲んで歌った歌。

♪ あかとんぼの 羽をとったら あぶらむし

♪ あぶらむしの 足をとったら かきのたね

というのは、あのねのねの歌。

でも、あぶらむしはないでしょう。

夏アカネならともかく、秋アカネは、燃えるような赤。

誰が見ても唐辛子ですよね。